

## 新出の刺絡専門書『痧脹晰義』について

長野 仁

森ノ宮医療大学大学院 保健医療学研究科

『日本医学史』に著録されながら、京大・慶大・日大の富士川文庫に現蔵されない医書は、版本の大尾に置かれた予告（医師の著作目録）や広告（書肆の蔵版目録）に列挙されていただけのものが多い。斯様な医書の書名は、伝存が絶望的なものにも拘わらず『国書総目録』に転載され、そのまま国文学研究資料館のデータベースにも反映されている。研究の過程で、こうした名存実亡の医書に行き当たると大いに氣勢を削がれるのだが、ごく稀に幻の医書が再び姿を現して思わず雀躍したくなることがある。

会津藩医の児島宗説（翻・楊阜・冲夫）は、生前に『古医方晰義』（1794成／1802刊）の刊行に漕ぎつけたが、巻末の「楊阜先生著述目録」には、①『古医方晰義』附『太陽病証治』出来・二巻、②同『陽明病以下証治』出来・三巻、③『傷寒論経伝晰義』未刻・十巻、④『痘疹証治大成』未刻・三巻、⑤『痧脹晰義』未刻・前後編、⑥『診脈精要』未刻・全、⑦『腹診精微』未刻・二巻、⑧『古医方活套』未刻・三巻、⑨『奇方類選』未刻・十巻、⑩『華佗内照方讚註』未刻・三巻、の10書がリストアップされている。このうち、①②が唯一開版された『古医方晰義』で、残る8書のうちの③⑥⑦⑧⑨の5書が『日本医学史』に著録されている。富士川游の選定基準を知る由もないが、選外となった④⑤⑩のうちの1書、⑤『痧脹晰義』の手写本が古書市場に出現した（2015年10月）。すなわち、該書は『国書総目録』未収本という書誌的価値に加え、孤本の刺絡専門書という臨床的価値も有するため、ここに報告する次第である。

『痧脹玉衡』（1723和刻）への疑念を発端に著された該書は、目録+引書：1葉、前編（目録には初編、編末には上編とあり）：14葉半、後編：7葉、都合22葉半からなる。この筆写本には序跋がないので成書年は定かでないが、前掲の目録から享和2年（1802）以前なのは確実で、「右陶氏ガ言トコロヲ見テ奇説ナルヲ疑イ、試之コト二十年」とあるから、宗説は遅くとも天明2年（1782）には刺絡の試行を開始していたことになる。

目録は、前編に痧論・刮痧法・烙法・放痧法、後編に後論・治験・入方・幼々集成神火治・夏禹錫臍風火法を挙げるが、後編は後ろの3項を欠いている。しかし、巻末は「『痧脹晰義』後編 終 小島宗節」と締めくくられているから、脱簡や落丁ではなく未定稿と考えるべきであろう。該書は、前編で『痧脹玉衡』を始めとする漢籍28種と『刺絡編』を含む和書3種の関連事項を徴引・整理して批判的な分析を加え、後編で自己流を展開しつつ治験例を挙げて持論の精確さを立証してみせる、という構成となっている。

該書の臨床面における特徴は、刺絡部位を最小限に抑制している点にある。「『玉衡』ニ云、放痧ノ穴、十ヶ処ナリ。余、常ニ刺ス処ハ簡ナリ。又、十指頭ヲ刺スコト左右ノ手足スヘテ二十ヶ処ナリ。余ハ皆是ヲ刺スコトヲマタス。手ノ大指・次指・中指ノ三指頭、左右共ニ六穴ヲ刺シテ皆甦レリ。……中略……手足十指ノ血脈、ミナー源ヨリ起ルモノユヘ、十指ミナ刺シ及スシテ愈ル也。予カ多年試ミタルコト也」と喝破している。刺絡専門書の現存書目数がそれほど多くない中で、出血過多のリスクを回避する立場で著され、しかも8症例を載せる該書の存在意義は大きい。

ちなみに、『古医方晰義』には「予、常ニ謂ラク、眼目ヲ活開シテ病ヲ視ハ、万病一毒ト云ンモ佳ナリ。又、万病万毒ト云ンモ佳ナリ。モシ瞎眼ニシテ病ヲ視ハ、一毒トスルモ非ナリ。万毒トスルモ非ナリ。翁ノ一語、老婆親切ナリトイヘトモ、扁鵲・華佗カ黙シテ言ザルニハシカス」といった、吉益東洞への批評が散りばめられている。東洞シンバではない宗説が著した⑥『診脈精要』⑦『腹診精微』の出現も俟たれるところである。